北日本新聞社提供

4年の沈黙破った長谷宗悦

生き難い時代 あえてスローに

――舟塚　雅恵

富士五湖が点在する山梨県南部、富士山の北側山ろくに、彫刻家・長谷宗悦のアトリエはある。アトリエの付近には、富士山噴火時の溶岩流によってできた本栖湖、精進湖があり、広大な青木ケ原の樹海が広がる。人類が誕生するはるか以前に形成された太古の昔そのままの自然が、今もなお開発の手を逃れて、多く残された場所である。

今夏に展覧会を間近に控えた作家のアトリエを訪ねた。河口湖方面から国道139号沿いに深い樹海を抜け、山頂にむかって道を曲がると富士山を仰ぎ見るすそ野が眼前に広がってくる。上九一色村はオウム真理教の一件で一躍名前が知られた所だが、本来は農業や酪農を中心とした穏やかな農業地帯だ。緩やかな傾斜の細い道をさらにあがっていくと、作家のアトリエがある。標高一二〇〇㍍のその場所は、富士山一合目の少し手前にあたり、一面背の低いカラマツで覆われている。訪れた時には、花が咲き、トンボやチョウなどが飛び交う美しい季節であった。一方で、冬には時に氷点下二〇度に冷え込むこともある大変厳しい自然環境の地である。

長谷がこの地にアトリエを構えて十年以上がたつ。住まいのある東京とアトリエのある山梨を往復する日々という。大変そうに思えるが、本人によると、生活と創作の感覚を切り離すことができてちょうどよいのだそうだ。

アトリエは一見倉庫のようにみえる建物で、屋外には木材が積み重なっていた。作品の材料なのだという。入り口の大きな扉をあけると、そこには出来上がったばかりの新作が部屋の中央に置かれていた。

私が長谷の作品を初めてみたのは十年ほど前である。そのころ作家はレリーフの仕事に着手していて、ディテールの繊細な作風が印象的だった。以後、発表のたびに東京に足を運んだが、平成十年を最後に発表を休止する。それから四年もの間、この地で作っては壊す、作っては壊すを延々と繰り返してきたという。自分の納得した作品だけを発表し、人々に見てもらう、そういった姿勢を貫いてきたのだ。

最近、食や生活の分野で「スローフード」「スローライフ」という言葉がしばしば聞かれるようになった。「ファスト（速い）」に対峙（たいじ）する意で、これまでの効率主義・商業主義に偏った方法を反省し、人間が長い時間をかけて作ってきた生活文化を見直そうという動きである。

日本の現代美術もまた、今やコマーシャリズムと結びついて、大量生産・大量消費、作品さえも速いスピードで消費されていく。長い時間をかけて、自らの制作や内面に真摯（しんし）に目を向け続ける美術作家たちにとっては、生き難い時代であろう。長谷もまた商業主義の対極にいるような作家である。

高岡市美術館での個展に向け新作を制作中の長谷宗悦
＝山梨県上九一色村のアトリエ、8月

今回の展覧会は四年ぶりの新作発表となった。四年というのは決して短い時間ではない。ともすれば現代の情報社会では存在自体も消えてしまいかねない。しかし、長谷は長く沈黙していた。そしてついに今回の作品が生み出されたのである。

新作にはこれまでと同様に廃材が使われている。打ち捨てられるはずだった細々した木材は、作家によって新たな命をふきこまれ、まるで私たちに手を差し伸べるように存在している。ちいさなかけら各々が時間を経てたどり着いた形のままに、ゆっくりと、それぞれがそれぞれの姿でいいんだよと、語りかけてくる。

（高岡市美術館学芸員）

◇

高岡市美術館で開催中の「長谷宗悦　1983－2002」（同館、北日本新聞社主催）は27日まで。